聴覚言語障害コース，聴覚言語障害児教育研究法
担当教員：高橋信雄，花熊 暁，山下 光，立入 哉

卒業研究への誘い

障害児教育講座・高橋信雄

1，はじめに

この授業は，卒業研究への誘いと研究の基本的手法を習得し，聴覚言語障害の領域における根拠に基づいた研究や教育実践が出きるための基本的能力を身につけることを目的とした.そのために，1）基本的な実験計画の立案，2）実施手順，3）データの処理　について，簡単な統計的手法を踏まえ学習する．また，各研究室での研究課題をきくことにより卒業研究への意識付けを行うことを試みた．今年度の授業内容は，以下の通りであり，当初のシラバスとは一部異なってしまった．

第1回　ガイダンス，科学的研究とは何か?
2回　聴覚言語障害の領域ににおける研究とは何か?
3回　文献の収集および文献研究の進め方
4回　各研究分野の典型的研究
5回　質問紙法
6回　面接法
7回　要因計画法（実験的研究）
8回　実践研究
9回　単一事例研究
10回　各研究室の研究手法（立入）
11回　各研究室の研究手法（山下）
12回　各研究室の研究手法（高橋）
13回　各研究室の研究手法（花熊）
14回　データの処理
15回　研究の過程とまとめ

今回の授業は，障害児教育の領域で最も多用するであろうと思われる単一事例研究について，十分な時間が確保できなかった．また，データ処理の内，数値の持つ意味と代表値については触れられたもの，データの数値化の意味とし方，さらにはこれら数値の可能な統計的処理とその実際については触れる時間がなかったことが反省として残った．特に，卒論発表会などの質問今後のことを考えると，基本的な統計処理として1）平均値と標準偏差(分散)の意味，2）相関関係，3）分散の質的な違いの検定と平均値の差の検定までは，実例を出しながらとりあげたかった内容であった．

2，授業アンケートより

この授業は，専攻学生11人を対象とした授業であり，授業を終えての学生の評価は，以下のようであった．

1）授業への参加

出席が，90%以上が91%であり，70%以上が9%であり，極めて高い出席率であった．授業への集中度は，90%以上が45%であり，70%以上が55%であり，それなりに集中はしていたようである．しかし，予習復習等の自主学習は，1時間程度が38%，ほとんどしなかったのが62%と大半であり，授業への意識的取り組みに問題を残している．これらのことから，授業へは出席しているものの，自分で何をしたらいいかがわからなくて，講義を受け身的にきいている様子がうかがえよう．

2）授業内容について

授業の目的や意義は提示されたとしたものが45%，ある程度のものが55%であった．興味・関心は，持てたのが63%，ある程度が36%であった．新しい知識や考え方は，得られたのが64%，ある程度が36%であり，授業目標が明確であり，興味・関心も高く，新しい知識等が一定程度評価されていたといえよう.それにも拘わらず,理解度では，よくが18%，ある程度が82%であり，教師になるための有効性では，思うのが27%，ある程度が45%，あまり思わないのが27%であり，理解度が必ずしも十分でなく，そのため授業目的が十分に理解されなかったものと思われた．結果的には，授業実践に活かしてもらうことを目指していたにも拘わらず，その意図が必ずしも十分には伝わっていなっかことは，多いに反省すべき事である．

3）授業方法

授業の方法には，問題がなかったのだろうか?学生へのアンケートによる授業評価では，話し方や進行度合いは,適切が45%,だいたい適切が55%であり,質問や発表の機会が十分あったのが18%，ある程度が66%，あまりなかったのが，27%であった．資料については，適切であったのが36%，だ

いたい適切が64%であった．また，授業の準備工夫は，十分と思ったのが36%，ある程度思ったのが64%であった．資料をその時間のはじめに配布したことと，量が多すぎたことにより，質問そのものがなかったり，質問を受ける時間がなかったことが一番の問題のようである．この点が悔やまれる．授業の展開としては，資料には実習課題が多く載っていたにもかかわらず，全くと言っていいほどする時間がなかった．今後，課題の実習を通して受講者の意見に基づいて話を展開するなどの工夫が必要になると思われた．

4）その他

自主的に取り組んだのが36%，だいたい取り組んだのが45%，あまり取り組まなかったのが18%であった．また，満足度は，満足が36%，大体満足が64%とおおむね満足できていたようである．

全体としては，学生の評価は，おおむね良好で好意的であったが，受け身的な側面はぬぐい去れない．前の時間に課題を出しておいて，それを考えてきて，発表させる中で，説明をしていく等，自主的に課題に取り組ませていく手法と課題への動機付けをどう作っていくかが問題と思われた．そのためには，教育実践の具体的事例をもとに興味や関心を引き出し，そこから説明を加えるなどの手法を導入する必要があろう．

3，各研究室の研究手法

各研究室での卒論のテーマや研究室の研究テーマ・領域を4人の先生方に話し手もらう中で卒論への意識付けと研究室の選択の機会を意図して実施したものである．学生からの応答は，卒業論文の指導教員を決める上で，大いに役だったものが64%，役だったものが27%，どちらともいえないものが9%であった．指導教員を決める前にこうした授業があることは，すごくよいとしたのが82%，よいとしたのが9%，どちらでもが9％であった．しかし，研究室を訪れて教員に直接たづねたのは，僅か1人（9%）であり，他は先輩の4回生や院生に話をききにいっており，手近なところで事態を処理し，自らの方向性をじっくりと考えることが少ないようにも見受けられた．全体としては，3回生のこの時期に各先生方の研究の話を聞く意義は，大きいと考えられる．しかし，先生方に直接聞いてみるなどの試みが全くないことに見られるように，日常的にオフィスアワーなどが全く活用されていない現状を反省しているといえよう．

4，統計法の利用と数値化の意味づけ

今回の授業では，シラバスでは載せていたが，時間の都合で省略せざるをえなかった．しかし，学生達は，数値の意味や統計については，全く学んでいない(100%)状況であった．論文購読や実際の研究での処理を通して学ぶにせよ，意図的にこうした側面を取り上げる必要がありそうである．その際には，教育指導上の必要性や意義を十分に説明することが大切になろう．

5，まとめと次年度への課題

この授業の当初の目的は，十分に達成できたと考えられる．しかし，以下の点で課題を残したと思われる．

・授業を通しても，学生の受け身的姿勢は，全体的にはあまり変わっておらず，その場だけで話を聞くことのみに終始している様子がうかがえる．自主的な対応力や学習力を十分に備えている学生達であるので，目的意識をどう持たせるかが，キーになりそうである．その意味では，各先生方の研究についての話は，今後も取り入れていきたい．

・オフィスアワーの活用と上級生の活用：いつでも窓口は開いているつもりなのだが，どうも敷居が高そうである．身近な上級生を通して学究上の問題に触れていくことから始められたらいいのであろう．

・事前の学習の導入：今年度は，内容を新たにしたこともあり，教員側の事前準備に時間がかかりすぎ，資料の配付が当該時間になってしまったが，次年度は，一つ前の時間に次の時間の資料を配付し，学生があらかじめ目を通してから授業に臨むなどの事前学習を取り入れてみたい．他の授業でもこうしたことは試みてきたが，現実的にはその場で処理することが多く見受けられたので，動機づけのきっかけをどう作っていくかさらに工夫を要する．来年度は，取りあえず，課題を明確にした事前学習とメモの導入を試みてみたい．

・統計処理の話の導入：基本的な数処理の利点について触れ，処理の必要性と意義を授業の中で取り上げてみたい．